参考資料５

山部会における活動成果資料

目　　次

1. 山部会の検討方針資料 ･･･ 1
2. 山村再生担い手づくり事例集関連資料 ･･･ 2
3. 矢作川流域圏森づくりガイドライン関連資料 ･････････････････････････････････ 6
4. 森づくりガイドライン関連図面 ･･･ 18
5. 矢作川流域圏木づかいガイドライン関連資料 ･････････････････････････････････ 22

参考資料

（2012. 1. 13 修正版）

出発点「矢作川の恵みで生きる」の共有

検討の進め方

山村をとりまく社会背景の変遷と望ましい将来像

STEP1

過去と現在を

知　る

理解と情報共有を促進する

右に記載した事項について、具体的に「知る」機会を設け、情報共有を図る
→ 市民企画会議
→ 勉強会で対応

実現に向けた課題と解決手法

STEP2

未来像実現に向けた課題と解決手法を

考える

情報共有を踏まえ、まず「人の問題」をテーマに解決手法を検討
→ 市民会議
→ 地域部会で対応

STEP3

できることから活動を

実践する

人と山村

高度経済成長前から後へ

●自給的経済、自立、自治、誇りがあった。
●百業をやっていた。

●若者が中下流の都市へ流出した。
●拡大造林によって広大な人工林が形成され、長期間管理し続ける必要があったが、その担い手がいなくなった。

現　代

●山村における若者の就業機会が乏しい。就業できても定着できない。
●現代では、山村は過疎化、少子化、高齢化、核家族化が進行している。

近未来（放っておくとどうなるか）

●限界集落、消滅する集落が増えていく。残された集落でも山村単独での自治や経済的な自立が困難となり、コミュニテイが崩壊する。
●国、県、市町村ごと、部局ごとに目指す森林の姿がバラバラで、流域圏一体となった森林管理が行われていない。

望ましい未来像

●流域圏にとって望ましい山村のあり方は、収入は多くなくても安定した若者の仕事があり、山村の資源を持続可能なやり方で利用しつつ、経済的に自立すること。
●自然の恵みを利用できる知恵のある人が定住していること。

森　林

●薪炭林施業が行われていた。
●最上流域や額田地区ではスギ、ヒノキ人工林施業が行われていた。
●藤岡・小原・旧豊田・岡崎にはハゲ山も多かった。

●もともと林業地だったところでも、そうでないところでも、もうかるというもくろみと国策により、拡大造林（広葉樹からヒノキ、スギへ転換）を推進した。
●国産材を流通させる仕組みが輸入木材に比べて整わず、国産材の価格が低下し、林業が業として成り立たなくなった。

●もともと林業地でなかった地域では、多くの所有者が素人山主で林業を知らない。
●管理が行き届かないため過密化した水消費型森林や放置人工林からの土砂流出・崩壊の危険性が増加している。

●林業は利益を確保せざるを得ないことから、森林皆伐後の再造林の放棄が起こり、森林の水土保全機能が喪失する。
●不適切な林道・作業道・搬出路が作られ、放置され、土砂が流出し、崩壊の危険性が高まる。

●流域圏にとって望ましい森林は、自然の力で持続する生態系と人による持続的な維持管理下に置かれる生態系が最適に配置され、多様な生物が生息し、木材や水などの恵みを中下流にもたらしてくれる森林。
●木材生産を主目的として管理する森林と、水土保全機能の発揮を主目的として管理する森林を区分し、木材生産に適さない人工林を天然林に戻していく。

実現のための課題と解決手法

森林の適切な管理は、まず山村の再生（担い手作り）から！

当面の課題1　誰がやるか（人と地域の問題）

課題

●現金収入、仕事、医療、教育など、出発点に到達する以前の問題が山積。

解決手法（例）

●既に自発的に始まっている優れた取組を集めた「山村再生担い手づくり事例集」の策定や矢作川流域山村ミーティングを通じ、山村再生の担い手作りを支援する具体的な方策を検討する。
●上下流をビジネスサイクルでつなぐ産業振興（流域フェアトレード）の推進（中下流都市中心部での上流生産物販売拠点の設置など）

役割分担

市民・学識経験者・行政が、対等な立場で、一体となって推進していく。

山村再生のために先ず"人づくり"が必要そのうえで"森づくり"にも取り組む必要がある。

担い手づくり事例集イメージ

- 山村再生担い手づくり事例集
  - 成功事例1
  - 成功事例2
  - 失敗事例1
  - ……

当面の課題2　何をやるか（森の問題）

課題

●流域圏として統一性のある森林管理を行い、矢作川の森の恵みが中下流や海までいきとどくためのガイドラインが必要。
●データ不足・研究の遅れによって、「植林こそが正しい」といった誤解を正すことが必要。

解決手法（例）

●「矢作川流域圏の森づくり・木づかいガイドライン」の策定
●モデル林の設定とモニタリング
→ガイドラインの検証のため、土砂を流す森、節水型森林の手本を作る。

行政・学識経験者・市民が対等な立場で、一体となって策定

役割分担

市民・学識経験者・行政が、対等な立場で、一体となってガイドラインを策定し、モデル林を設計、施業、研究し、モニタリングを行っていく。

山村再生担い手づくり事例集　取材先と取材者のマッチング表

取材先	取材者
根羽村森林組合、ねば杉っこ餅、根羽村猟友会	＊洲崎燈子、高橋伸夫
恵南森林組合、NPO法人東濃・森林づくりの会、NPO法人福寿の里自然倶楽部	＊近藤朗、蔵治光一郎、安藤里恵
NPO法人奥矢作森林塾、株式会社M-easy、旭木の駅プロジェクト	＊浜口美穂、眞木宏哉
とよた森林学校＋OB会、とよた都市農山村交流ネットワーク、おむすび通貨	＊沖章枝、長澤壮平、松井賢子
矢作川水系森林ボランティア協議会、green maman、農業法人みどりの里	＊蜂須賀功、後藤伸也
豊森なりわい塾、千年持続学校	＊丹羽健司
NPO法人中部猟踊会・三州マタギ屋、岡崎森林組合、おおだの森保護事業者会、じさんじょの会	＊井上祥一郎、西原　均
	＊はチームリーダー

2013年度「山村再生担い手事例集」事務局　整理表

番号	取材先	取材日	報告ノート
1	根羽村森林組合	11月27日	○
2	ねば杉っこ餅	11月27日	○
3	根羽村猟友会	12月9日	○
4	恵南森林組合	12月11日	取材先確認中
5	NPO法人東濃・森林づくりの会	12月10日	○
6	NPO法人福寿の里自然倶楽部	11月8日	○
7	NPO法人奥矢作森林塾	12月7日	○
8	株式会社M-easy	11月27日	○
9	旭木の駅プロジェクト	11月27日	執筆中
10	とよた森林学校	11月21日	○
11	とよた森林学校OB会	11月21日	○
12	とよた都市農山村交流ネットワーク	10月29日	○
13	おむすび通貨	11月21日	○
14	矢作川水系森林ボランティア協議会		執筆中
15	green maman	11月25日	○
16	農業法人みどりの里	11月14日	○
17	豊森なりわい塾		執筆中
18	千年持続学校		執筆中
19	NPO法人中部猟踊会・三州マタギ屋	11月19日	○
20	岡崎森林組合	2月19日	○
21	おおだの森保護事業者会	12月11日	○
22	じさんじょの会		取材前

山村再生担い手づくり事例集

矢作川流域圏懇談会

2014年3月

矢作川流域圏懇談会　とは…

矢作川流域は矢作川沿岸水質保全対策協議会の活動に代表されるように、“流域は一つ、運命共同体”という共通認識のもとでさまざまな課題に取り組んできた歴史があります。

2009（平成21）年7 月に河川法に基づいて「矢作川水系河川整備計画」が策定され、その中で治水、利水、環境、総合土砂管理、維持管理などの課題に対し、民・学・官の連携・協働による取組が必要であることが明記されました。これを受けて国土交通省豊橋河川事務所は2010（平成22）年8月、流域住民・関係機関も含めた話し合いを通じて連携・協働の取組を行うことで、流域圏全体の発展につなげることをめざす「矢作川流域圏懇談会」を立ち上げました。

矢作川流域圏懇談会は山部会、川部会、海部会で構成され、各部会で学識者・行政・関係団体・市民団体などのメンバーが連携して地域の課題を抽出し、その解決方法を探っています。また部会間の連携によって、持続可能な流域圏のあり方を模索しています。

山村再生担い手づくり事例集　とは…

矢作川流域圏懇談会山部会は流域の山の問題を「人と山村の問題」と「森林の問題」に分けて整理しました。水源の森づくりを担う山村で過疎化と少子高齢化が進んでいるとのが「人と山村の問題」です。解決の糸口として、矢作川流域で農業、林業、林産業、定住支援などの中山間地振興に携わる団体・個人の活動情報を共有し、生産者と消費者、農村と都市の住民、関連する団体・個人同士のネットワーク作りを支援する「再生担い手づくり事例集」の作成を提案し、実施しました。

この事例集によって中山間地振興について流域住民の意識を啓発することをめざすとともに、具体的な支援方法を示します。そしてゆくゆくは流域内でお金、人材、物がまわり、食・エネルギー・水・医療・教育・安心安全の自治が達成されることをめざしています。

目　次

長野県
根羽村
1 根羽村森林組合 ・・・・・・・・・・・・・・ 1
2 ねば杉っこ餅 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
3 根羽村猟友会 ・・・・・・・・・・・・・・・ 5
岐阜県
恵那市
4 恵南森林組合 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
5 串原林業 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
6 NPO法人奥矢作森林塾 ・・・・・・・・・・ 11
7 NPO法人福寿の里自然倶楽部 ・・・・・ 13
愛知県
豊田市
8 矢作川水系森林ボランティア協議会 ・・ 15
9 とよた森林学校 ・・・・・・・・・・・・・・ 17
10 とよた森林学校OB会 ・・・・・・・・・・・ 19
11 とよた都市農山村交流ネットワーク ・・・ 21
12 豊森なりわい塾 ・・・・・・・・・・・・・・ 23
13 株式会社M-easy ・・・・・・・・・・・・・ 25
14 旭木の駅プロジェクト ・・・・・・・・・・・ 27
15 千年持続学校 ・・・・・・・・・・・・・・ 29
16 おむすび通貨 ・・・・・・・・・・・・・・・ 31
17 green maman ・・・・・・・・・・・・・・・ 33
18 農業法人みどりの里 ・・・・・・・・・・・ 35
岡崎市
19 NPO法人中部猟踊会 ・・・・・・・・・・・ 37
20 岡崎森林組合 ・・・・・・・・・・・・・・ 39
21 おおだの森保護事業者会
（山留舞会―やるまいかい） ・・ 41

根羽村森林組合

調査団体名	根羽村森林組合	団体代表者名	大久保憲一
設立年	1951（昭和26）年	対応してくれた人の名前	今村　豊
団体URL	http://www.mis.janis.or.jp/~nebasin/		
活動拠点	長野県下伊那郡根羽村407-10	調査員	洲崎燈子、高橋伸夫
取材日	2013年11月27日	レポート作成者	高橋伸夫

活動内容

従業員は43名。組合員の森林整備と生産木材の加工で年間総売上は4億円弱。年間200haの間伐を行っているが、材の搬出は52～60ha程度で材積5,000～6,000㎥である。製材加工売上は2億2千万円程度であり、在庫の材や根羽村以外からの材を含め年間約2500㎥を加工して工務店に直送している。住宅1棟あたりおよそ20㎥なので年間およそ130棟分にあたる木材製品を出荷している。

キャッチフレーズ

山の民の志で進める森づくりと木づかい

会のモットー（何を大切にしているか）

全ての森林資源を活かした持続可能な森林づくり、林業の理想を目指す。その担い手が森林組合であり、森林組合がまず中心となって持続可能な村づくり、地域づくりに率先して取り組む。

設立から現在に至るまで変化したこと

1995年からが再興期で、村内の民間製材工場の閉鎖に伴い村で設備を購入。2006年建築士会に材料屋として入会（工務店や設計士の満足する製材加工をする）。2000年頃乾燥技術の確立。2013年3月JAS規格取得。
現在林産技能職員（約10名）の全てがアイターン者である。

連携している団体・専門家・自治体など

安城市・明治用水・アイシングループ・信州大学農学部・岐阜女子大学・JIA長野建築士会（建築士・工務店）・矢作川流域圏懇談会

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動（例：小仕事づくり、山村・森林資源活用など）

伐採・搬出の1次、製材次加工の2次、工務店への直送販売による3次の6次産業化。切り捨て間伐の未利用材を木の駅プロジェクトで収集し、特別養護老人ホームの薪ボイラーで使用するNPO「薪の駅」の設立を来年（2014年）の4月に計画しており、材の収集・乾燥から燃焼までの作業を4,500円/㎥で担当する。小中学生まで木の駅プロジェクトの登録対象として、地域通貨がお小遣いになるようにする。

現在直面している課題

・製材加工の利益率向上。全ての地域資源を活かした産業の創設による雇用と生業の確保。
・アイターン職員の定着率向上。

今後やってみたいこと

JAS工場の資格を生かして矢作川下流域への販路拡大を図りたい。このため、長野・愛知・岐阜・静岡の各知事に木づかいプロジェクトリーダーになってもらい、根羽村村長を含めた5者での対談を企画したい。建設予定の小さく住まう魅力的な木の住まいをモニター体験しながら、林産資源の活用や田舎暮らしの良さについて話し合う中で各県の対策事例の紹介や情報交換を行い、行政の壁を超える協力体制などを構築してもらう。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

3県で取り組んでいる森づくり・木づかいのキーパーソンを発掘し、森づくり・木づかい推進のワーキングショップ・ブレーンストーミングを行いたい。具体的には各県の林業普及指導員、地域材中心の工務店、木工クラフトマン、建築士、建築士グループ等の木づかい推進団体と、耕ライフ、とよた森林学校等の木育活動団体等で、彼らが既に行っているライフステージアタック表（各ライフステージでの木づかい推進アイディアを一覧表にしたもの）の実践活動として紹介し、さらに多くの市民を森づくり、木づかいの世界に誘いたい。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞アイターン者の定着率は？　定着率向上の対策は？
＜答え＞定着率は正直に言って良いとは言えない。自分の技能や生活水準を上げることを優先して、地域よりも個人の力としたい考え方の者もいる。技術を習得した3年目程度で転出されると落胆が大きい。本人の問題でなく、同伴者が地域に馴染めない場合も定着を阻害する。根羽村での林業を志すアイターン者に対して「根羽村森林組合　基本理念・存在意義」というマニュアルを作成配布して組合や作業の詳細説明からモチベーションの維持方法、根羽村への馴染み方などを解説。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞低コスト造林に着目した理由は？
＜答え＞山主さんへ還元金の確保が必要。職員の各種保険や手数料等でもコストが掛かるので、補助金も出来る限り確保して林産収入を補填したい。間伐を15～20mの帯状伐採とすれば3回程度に分けて伐採ができる。伐採と同時に植栽も行えば植栽の補助金も受けられ、コンテナ苗を使用すれば作業効率も高くなる。さらに獣害対策を施せば獣害対策補助金も受けられる。伐採跡に人工芝を敷いて獣の動きを変え、罠にかかり易くするなどという案もある。

その他、伝えたいこと

<u>トータル林業の実現</u>:「トータル」には根羽村の全員が組合員であることと、木の全てを活かすという意味を含む。材として使用される部分は勿論のこと、端材や木の皮・オガ粉なども残らず利用する。材の乾燥に以前は灯油を使用していたが、現在はこうした木屑を活用している。さらに枝は小型ストーブの燃料に、葉からアロマオイルを抽出できないかなども検討。
<u>長野県以外への進出・拡販</u>:村民全てを森林組合員とする政策を継続して人工林率73%。村で木材加工工場を保有して今年JAS規格を取得、準備は整ったわけである。この根羽村で林業が成り立たないとすれば、国内どこの林業も成り立たないということである。矢作川の水源として下流域から認められ交流してきた歴史もある。矢作川の流域である愛知県に根羽村の森林製材を普及させたい。また、同じ流域で疲弊している林業を回復するために根羽村の製材工場やノウハウを活かしたい。たとえば、豊田市産の材を根羽で製材し、JAS製品とするといったことが考えられる。
<u>里山資本主義</u>:里山の産物を活用し、流通させたい。豊田市足助地区の香嵐渓は里山を観光資源として確立した成功事例。すてきな森と木と水、そこで過ごすすてきな時間は商品になる。そこで生まれるスモールビジネスを生業にしたい。

写真

根羽杉の家で見学者に説明する
今村氏（右）

低コスト造林試験地

プロセッサによる造材

年表

年	できごと
1958　昭和33	村内各戸へ13haの貸付山制度実施
1966　昭和41	貸付山貸付料廃止（年間800円）
1979　昭和54	矢作川水質保全対策協議会へ加入
1981　昭和56	根羽中学校が安城市七夕祭りに招待（以後毎年）
1982　昭和57	根羽村森林組合が全国優良組合として表彰を受ける
	安城市野外教育センターが茶臼山に完成
1992　平成4	緑化推進運動功労により内閣総理大臣表彰を受賞
1995　平成7	村内民間製材工場閉鎖に伴い、村で設備を購入
2005　平成17	長野県ふるさとの森林づくり条例に基づき「森林整備保全地域」に全村指定
	根羽杉の柱50本提供事業開始
	アイシングループと森林の里親契約を締結
2006　平成18	「ふるさとの森づくり県民の集い」を根羽村で開催
	根羽杉モデル住宅「杉風（さんぷう）の家」完成
	川上村・根羽村村有林交換盟約書調印
2009　平成21	組合事務所の改築。「森づくり」と「木づかい」の職場が同じ場所になる

2006～2012年　製材加工場施設の拡充（製材・加工・乾燥機、構造材用モルダー、木質ボイラー）

ねば杉っ子餅

調査団体名　：　ねば杉っ子餅　　団体代表者名　：　石原みちゑ
設立年　：　1999（平成11）年　　対応してくれた人の名前　：　石原みちゑ、原小夜子
団体URL　：　http://nebakanko.com/shisetsu/neba_sugikkomochi.html#
活動拠点　：　長野県下伊那郡根羽村1855　　調査員　：　洲崎燈子
取材日　：　2013年11月27日　　レポート作成者　：　洲崎燈子

活動内容

根羽村の40～70代の主婦15人ほどの団体で、原木椎茸を使ったきのこおこわ、よもぎの草大福、米粉を練ったからすみ、ねぎ味噌たれの五平餅など、地元の素材を生かした手作りの農産加工品を生産し、自家製の野菜とともに村内外のイベントで販売している（主に週末）。岐阜女子大学の学生との共同で、森林組合が根羽杉で作った弁当箱に根羽の山の幸いっぱいのお弁当を入れた「根羽のはこいり娘」も開発した。村内のイベントや仏教行事での食事の提供も行っており、250人分の食事を作ることもある。

キャッチフレーズ

地産地消で生涯現役！

会のモットー（何を大切にしているか）

根羽にある物を使う、根羽にいる人を使う。お客さんとお互いの顔が見える対面販売にこだわる。からすみや豆餅など伝統の行事食を定番の商品にして、根羽の味として伝えていく。村の農産物を使うとメンバーも張り切って野菜を作ってくれる。メンバーには「家に引きこもらず、体が動くうちは来て」「ここの仕事がある日は限られているので、こちらを優先して」と働きかけている。メンバーが培ってきた知恵や技術を生かし、お客さんに喜んでもらうことの生き甲斐を感じられる場になっている。

設立から現在に至るまで変化したこと

何度も試食し、お互いに注意して真剣に商品開発を行うようになった。お客さんの反応もよく見るようになり、商品を食べてもらうことに緊張感を感じるようになった。イベントに出店する時、経験に基づいて出店先の客層や天候によるニーズの違いを見極め、売る商品や量を変えたり、売り手も買い手も運ぶのが大変な重量級の野菜（大根、白菜など）を避けるなどの工夫をするようになった。年収が500万円に届くようになった。

連携している団体・専門家・自治体など

根羽村、安城市、アイシン、株式会社JTN、岐阜女子大学など。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動（例：小仕事づくり、山村・森林資源活用など）

村内の主婦に、負担にならない勤務体制で、子どもを抱えて正規で働けない人や自営業者の奥さん、定年退職者にも末永く働ける場を提供している。メンバーの中には70代後半で入院しても「杉っ子餅に行かなきゃ」と言い、退院したら杉っ子餅に戻って亡くなる寸前まで働いていた人もいる。

現在直面している課題

・現在は石原、原の両氏で会を取り仕切ってうまくやっているが、後継者の確保が課題。新しい人も少しずつ入っているが、責任を持ってやってくれるかは未知数。
・本当は毎日、半日でも活動できるといいのだが、取り扱っている商品に餅など日持ちがしない物が多いため、販路がはっきりしないと難しい。

今後やってみたいこと

日持ちする商品が少なく、根羽村の複合施設ネバーランドなどでの販売が難しいので、冷凍できるからすみ(カット済み)を随時解凍して販売できるようにしたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

ネバーランドなどとの商品情報の共有と連携。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞活動している上での苦労を教えてください。
＜答え＞村外のイベントに出店する際は深夜2時、3時から準備を始めることもある。そんな時も、活動日が限られていることもあるが、メンバーが積極的に出てきてくれるのがありがたい。活動場所(旧保育所)の隣が墓地で夜は少し怖いが、今は昔と違って火葬だから大丈夫と皆で言いながらやっている。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞原木椎茸ほか、きのこの栽培について教えてください。
＜答え＞村内できのこの原木となる広葉樹を販売している。きのこおこわの椎茸は村内で原木栽培している方から買ったり、メンバーが自前で少量栽培しているものを持ち寄って調達している。原木は殆どマキ(アベマキ)で、樹皮が厚いためとても長持ちする。シデの木も原木にするが、椎茸は早く出るものの、樹皮が薄く長持ちしない。シデ、サクラはナメコ栽培にも使う。

その他、伝えたいこと

組織が続かないと元も子もないので賃金の大幅アップはできないが、年末にささやかながら各メンバーが働いた時間に応じた手当を支払う。するとメンバーのやる気がアップする。今年度は収益で初めて旅行に行く(なばなの里)。個人経営ではないので、黒字になればその分を分け合う(機械の修繕代を除いて)。活動を続けてこられたのは、メンバーそれぞれの家族が応援してくれていることも大きく、ありがたい。

写真

原さん(左)と石原さん(右)

よもぎ大福作成風景

「根羽のはこいり娘」の弁当箱

心温まるおもてなし。右下が名物のからすみ

・矢作川流域圏森づくりガイドラインについて

森づくりWGの議論をはじめるにあたって

２０１３．１２．１１

「森づくり WG」の議論を始めるにあたって

担当　蔵治光一郎

１．「森づくりガイドライン」の中身を議論しはじめる前に、まずは流域圏の「森づくり」の実態をリストアップし、「矢作川流域の森づくり」と題する資料を作成したい。川部会、海部会、流域圏の住民が一目見て、矢作川流域圏の森の全体像が理解できる資料。

> （１）．①現況図（地形図、植生図など）
> ※ごくおおざっぱなもの（例：1km メッシュ）
> →　事務局補佐（建設技術研究所）
> （２）．②地区別「岡崎、豊田、恵那、根羽、平谷」の森林の基礎データ
> 森林面積、人工林面積、天然林等面積　→　洲崎さん
> 過去 5 年間の間伐の、補助事業の種類別の実績　→　各市村
> 行政が長期計画の目標としている森林型と、その面積　→　蔵治
> （３）．③各地区でアピールしたい特色のある「流域圏の森づくり」の事例、
> および、市境・県境を超えた連携による森づくりの事例
> →　各県、各市村、それぞれ１事例ずつ
> （フォーマットは現時点では特に定めません。１事例を A4、１枚で
> お願いします）

矢作川流域圏における最近 5 年間の間伐面積の実績

矢作川流域圏における最近5年間の間伐面積の実績

		2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
岡崎市	計				365.2	423.9	524.0	418.5	396.4
	公共造林				152.0	104.4	190.0	45.2	43.1
	治山				103.8	87.9	79.1	50.6	38.1
	矢作川水源基金				89.1	109.3	98.8	121.7	128.3
	青木川流域造林					2.6	1.0	0.9	1.8
	県税					66.4	126.5	115.1	126.3
	加速化					13.8	21.8	28.0	7.6
	森林農地整備センター				13.5	19.7	1.4		8.6
	県独自事業等							0.3	5.2
	闇苅国有林					15.4		8.4	20.2
	農林公社				6.8	4.3	5.5	48.5	17.2
豊田市	計	1270.0	1351.0	1280.0	1276.0	1477.0	1403.0	1383.0	1112.0
	保安林	347.0	346.0	421.0	319.0	234.0	228.0	167.0	83.0
	農林公社	254.0	151.0	106.0	87.0	108.0	179.0	322.0	44.0
	県税				5.0	205.0	416.0	436.0	506.0
	県有林	43.0	47.0	14.0	26.0	23.0	42.0	46.0	32.0
	市補助伐り置き	546.0	697.0	680.0	724.0	788.0	407.0	289.0	217.0
	市補助巻き枯らし			3.0	5.0	3.0	1.0	2.0	2.0
	市補助利用	80.0	100.0	48.0	104.0	82.0	109.0	97.0	137.0
	山主自力		10.0	8.0	6.0	34.0	21.0	24.0	91.0
	公共造林				431.0	455.0	270.8	113.3	
	矢作川水源基金				197.0	218.0	156.9	163.2	
	高齢級							4.1	
	巻き枯らし				0.0	1.0	1.2	1.5	
	水道水源保全基金				97.0	99.0	32.6	30.5	
	市有林				108.0	100.0	55.9	75.2	
恵那市	計							1010.8	550.8
	造林補助金							291.6	306.6
	条件不利							656.7	
	県税								153.4
	美しい森林							13.2	11.3
	保安林							29.4	48.8
	矢作川水源基金							14.3	13.1
	その他							5.7	17.7

岡崎市域間伐実績

(ha)

	H20	H21	H22	H23	H24
公共造林事業 ※	152.01	104.43	190.00	45.17	43.12
治山事業 (本数調整伐)	103.77	87.88	79.10	50.57	38.13
水源林対策事業 (矢作川水源基金)	89.11	109.34	98.77	121.74	128.32
水源林対策事業 (青木川流域造林事業)	0.00	2.57	1.00	0.90	1.76
あいち森と緑づくり森林整備事業(人工林)	–	66.43	126.46	115.08	126.29
森林整備加速化・林業再生事業	–	13.79	21.78	27.96	7.55
森林農地整備センター	13.48	19.72	1.39	0.00	8.6
その他(県独自事業など)				0.25	5.15
闇苅国有林	–	15.38	0.00	8.40	20.2
農林公社	6.80	4.34	5.50	48.47	17.24
計	365.17	423.88	524.00	418.54	396.36

※岡崎市内の間伐実施面積集計であり、市有林等の区別はされていない。

矢作川流域圏における森づくり実践活動

蔵治　光一郎

１．　はじめに

森林の洪水緩和や渇水緩和機能を巡って研究者が努力している間も、間伐されずに放置される人工林の面積は増加し続け、土砂崩れや水害などの自然災害も毎年のように発生してきた。間伐すべき時期が来ても人工林を間伐せずに過密状態のまま放置することは、自然災害や水枯れのリスクを高め、森林所有者の財産としての価値を損ねるだけでなく、下流域圏の住民の公益も損なわれるという認識が広く形成され、問題解決へ向けて行政、研究者、森林ボランティア、市民による様々な実践活動が全国のいたるところで行われるようになった。それらの活動の多くは、私的所有と公的支援の束縛という森林を巡る古典的なジレンマや、政策転換による制度変更、短期的な国民の価値観の変化に振り回され、挫折を繰り返しつつ成長していく途上にある。

蔵治・保屋野編（2004）は、高知県梼原村の事例を紹介しているが、ここでは愛知・岐阜・長野県を貫流する矢作川の「流域圏の森づくり」に向けた諸活動の成果と課題について、最近 10 年間の動きに焦点を当てて紹介する。矢作川流域の約 7 割は森林で、そのうち約半分はスギ・ヒノキ・カラマツの植林地（人工林）である。本節では矢作川流域圏内の地名がたくさん出てくるが、額田町を除き、図－１に記載された名称を使用し、岡崎市に合併された額田町については旧額田町と記載する。

なお、10 年以上前から続いている矢作川流域圏の森を巡る諸活動については、すでに多くの出版物で紹介されている（銀河書房編（1994）、依光編（2001）、蔵治ら編（2006）など）ので、本節では概要のみを紹介する。

図―１　豊田市が 2005 年に広域合併した後、岡崎市が額田町と 2006 年に合併する前の矢作川流域図（蔵治ら、2006 を一部改変）。

２．　矢作川流域圏の森と水と人の歴史

矢作川流域圏の森は、江戸時代末期には主に採草地として山焼きを繰り返す管理がされていたか、または薪炭林施業が行われていた。明治初期に入り、稲武地区では古橋源六郎暉皃氏ら、旧額田町では山本源吉氏らが主導し、スギやヒノキの植林が開始された。

矢作川流域に住み、矢作川の水を利用してきた人たちは昔から、森に降った雨や雪が集まった水を使っていることを認識し、森に感謝の気持ちを持っていた。1880 年、全国の農業水路のさきがけとなる明治用水が開削され、1901 年に明治用水頭首工が完成する。明治用水組合会（後の明治用水土地改良区）は、1902 年に結成された矢作川漁業保護組合（後の矢作川漁業協同組合）組合長の鈴木茂樹氏の働きかけもあって、1908 年から順次、下山地区、旭地区、根羽村、平谷村の森林、計 525 ヘクタールを購入した。2007 年度からはこの森林の維持管理に充当するため「水源かん養林基金」を設立し、広く寄付を募っている。

高度経済成長期の矢作川では流域の開発に伴う濁水が問題となった。1969 年に明治用水土地改良区が農・漁業団体に働きかけ、流域市町村も加わり、地域が一体となった水質保全のための組織として矢作川沿岸水質保全対策協議会（矢水協）が設立された。さらに 1971 年には、地域開

発に関する理論と開発方式の調査研究を行う組織として矢作川流域開発研究会（矢流研）が設立された。矢水協は実戦部隊、矢流研は矢水協の理論的支柱の役割を果たし、矢流研の会長であった伊藤郷平氏が提唱したと言われている言葉「流域は一つ、運命共同体」はやがて矢水協のスローガンとなった（銀河書房編、1994、矢作川漁協 100 年史編集委員会、2003）。

矢作川本流には明治用水頭首工、中部電力が所有する水力発電ダム、国土交通省直轄の多目的ダムなど本流に 7 つのダムがある。ダム等の建設を促進し、水資源の開発と国土の保全に寄与することを目的として、1974 年に施行された水源地域対策特別措置法（水特法）の規定により、全国 8 基金の一つとして矢作川水源基金が 1978 年に設けられた。この基金は、流域圏の人工林の間伐補助金として今に至るまで効果的に使われている。8 基金のうち水源林対策を明記し、間伐の補助金を支出しているのは矢作川と豊川のみである。

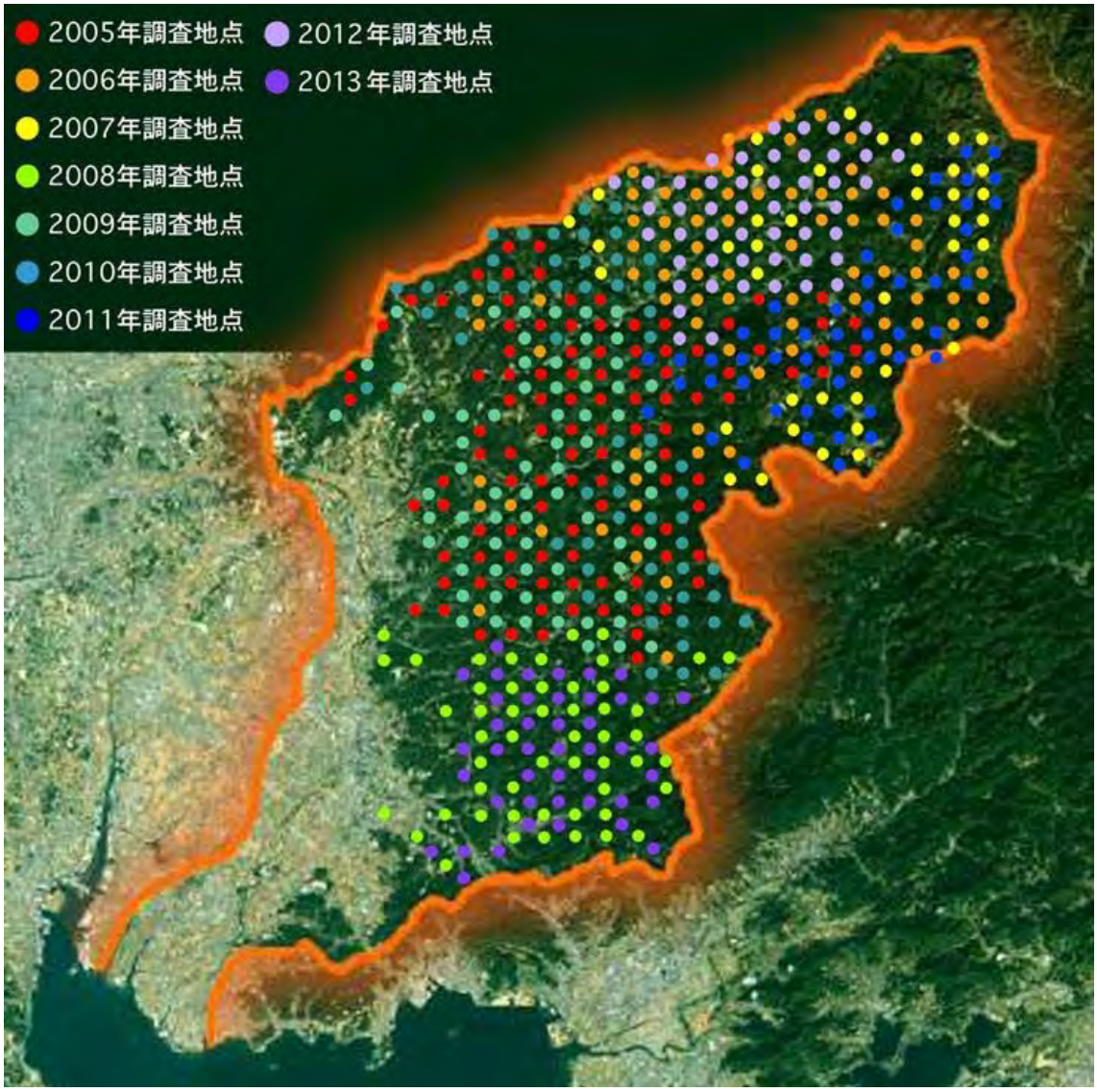
明治用水の受益地域が多くを占める安城市は、根羽村との間で「矢作川水源の森」森林整備協定を結んだ。これは 1991 年から 30 年間の 48 ヘクタールの分収育林契約であり、森林整備協定の全国第一号であった。1993 年には豊田市水道事業審議会が「将来にわたり水道水が安全でおいしい水であるためには、水道水源の保全が必要である」と答申し、これを受けて 1994 年に水道使用者から使用量 1 トンあたり 1 円を上乗せ徴収して積み立てる豊田市水道水源保全基金が設けられた。この基金による人工林の間伐は 2000 年から始まっている。

旧額田町も 2004 年、使用量 1 トンあたり 1 円を上乗せ徴収して「ぬかたの源流の森づくり基金」を創設し、間伐作業等の直接的な森林整備事業、森林の役割についての啓発及び学習事業、ボランティアによる森林整備及び間伐材利用促進運動の支援事業、上下流域の交流促進事業に使っていた。しかし 2006 年に額田町が岡崎市と合併した際にこの基金は廃止されてしまった。

３．　矢作川流域森の健康診断

2000 年に矢作川流域圏は東海（恵南）豪雨に襲われ、沢筋が崩落して大量の土砂と根こそぎ倒れた木が川を流れ下り、矢作ダム貯水池に流れ込み、280 万立方メートル（約 15 年分）の土砂、3 万 5 千立方メートル（約 60 年分）の流木がひと雨で矢作ダム貯水池に流れ込んだ。この影響もあり、2004 年に矢作ダムの堆砂量は計画堆砂量を上回った（渡邊・田島、2008）。この災害をきっかけとして、矢作川上流域の森林が間伐されずに放置されている実態が明らかになっていった。

2004 年に矢作川水系森林ボランティア協議会が結成された。同年、豊田市矢作川研究所の洲崎燈子氏と蔵治が共同代表となって矢作川森の研究者グループ（矢森研）が結成され、矢森協と矢森研で森の健康診断実行委員会が組織された。実行委員会は「矢作川森の健康診断」を 2005 年から毎年 1 回実施し、2013 年の第 9 回までに参加者 2,069 人が 549 地点を調査した。調査地点は一辺 2 キロメートルの格子点で行い、第 4 回までに流域を 1 巡し、第 9 回までに 2 巡した（図―２）。その結果、調査地点の 59 パーセントが胸高断面積合計 50 平方メートル／ヘクタール以上、50 パーセントが林分形状比 80 以上、72 パーセントが相対幹距 17 未満といった「過密人工林の基準」を超えており、過密人工林と診断された。「超過密」とされる相対幹距 14 未満の地点が 48 パーセントもあった。調査結果は森の健康診断ポータルサイトで公開されている。

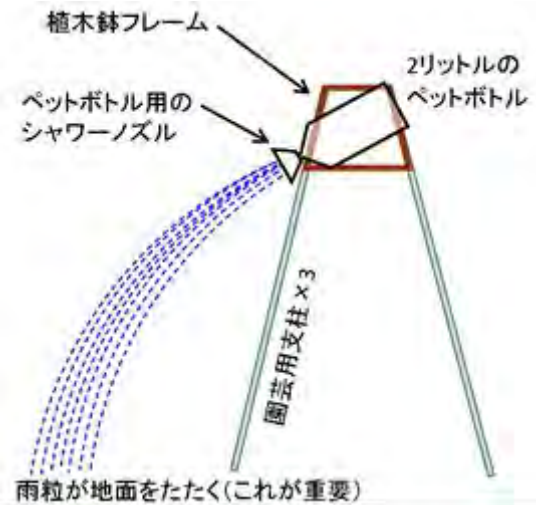


図―２　矢作川森の健康診断の調査地点（第 9 回矢作川森の健康診断実行委員会、2013）

矢作川森の健康診断の結果で特筆すべきことは、1 巡目と 2 巡目の比較結果である。恵那市の串原、上矢作町、明智町の地域では 2006～07 年に 1 巡目の 47 地点、2012 年に 2 巡目の 42 地点の健康診断を行った。その結果、平均植栽木密度は 1679 本／ヘクタールから 1360 本／ヘクタールに減少した一方で、胸高直径の中央値は 19 センチから 23 センチに増加した。草と低木の被覆率、種数の平均値はそれぞれ 1.5 倍、2.0 倍に増加した。この地域では 2006 年から 2012 年にかけて間伐が進み、植栽木の本数密度が下がり、草と低木の被覆率や種数が増加し、「森が健康になった」ことが証明された（第 8 回矢作川森の健康診断実行委員会、2012）。この地域を管轄する恵南森林組合は、この期間に大胆な経営改革を断行し、民有林での間伐の事業量を大幅に増加させると同時に、自力での事業だけでなく民間事業体との連携による森づくりも推進しており（酒井、2012）、その努力が実って間伐面積が顕著に増加したことが、木材の生産量ではなく、間伐面積を評価する仕組みである森の健康診断の結果に現れたと考えられる。

2009 年の第 5 回矢作川森の健康診断からは、オプション調査として「緑のダム実験」も開始された。これは簡易な人工降雨実験装置で、約 2 メートルの高さから、2 リットルのペットボトル

に満たした水を、ボトルの先端に取り付けたシャワーノズルから地面に降らせる。ペットボトルは３本の園芸用支柱で支えた植木鉢用フレームに差し込んで固定する（図―３）。この装置は 100 円ショップで購入可能な物品のみを使って組み立てることができる利点があり、降雨の浸透能のデータを得ることはできないが、１）豪雨の際に洪水を引き起こす原因となる表面流発生の有無、２）散水地点の水の浸みこみ易さの指標となる散水停止時の散水域の水溜りの有無、３）水溜りの水が地面に浸み込むまでの時間、などをおおまかに知ることができる（第 9 回森の健康診断実行委員会、2013）。



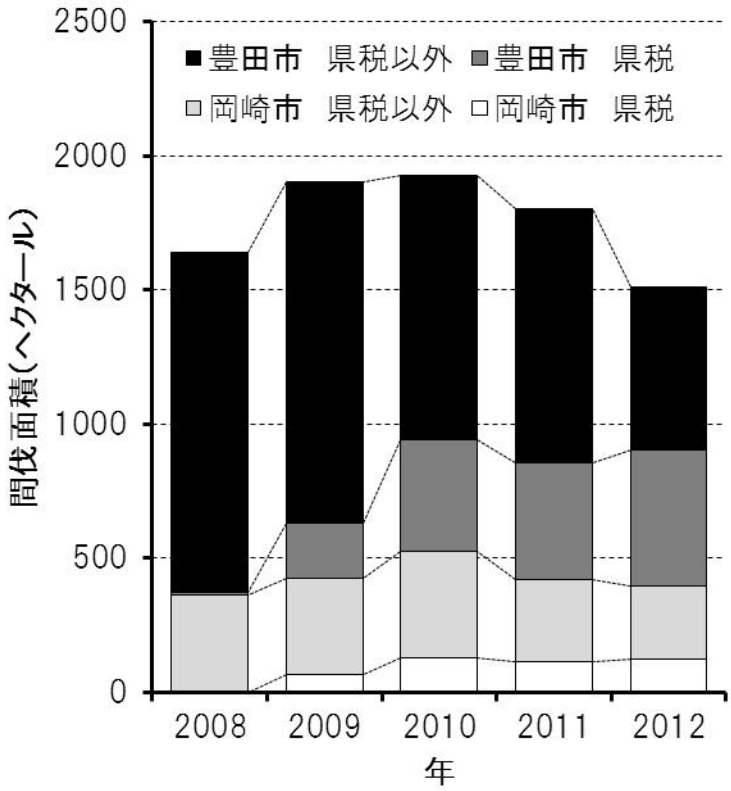
図―３　緑のダム実験の模式図（第 9 回矢作川森の健康診断実行委員会、2013）

４．　市町村合併と流域圏の森林

豊田市、岡崎市、恵那市はそれぞれ 2005 年、2006 年、2004 年に広域合併した。豊田市と岡崎市は市域のほぼ全域が矢作川流域内に含まれ、都市と水源の森とが一体化した自治体になった。恵那市は矢作川、庄内川、木曽川の 3 流域にまたがる市となり、根羽村、平谷村は合併しない道を選んだ。

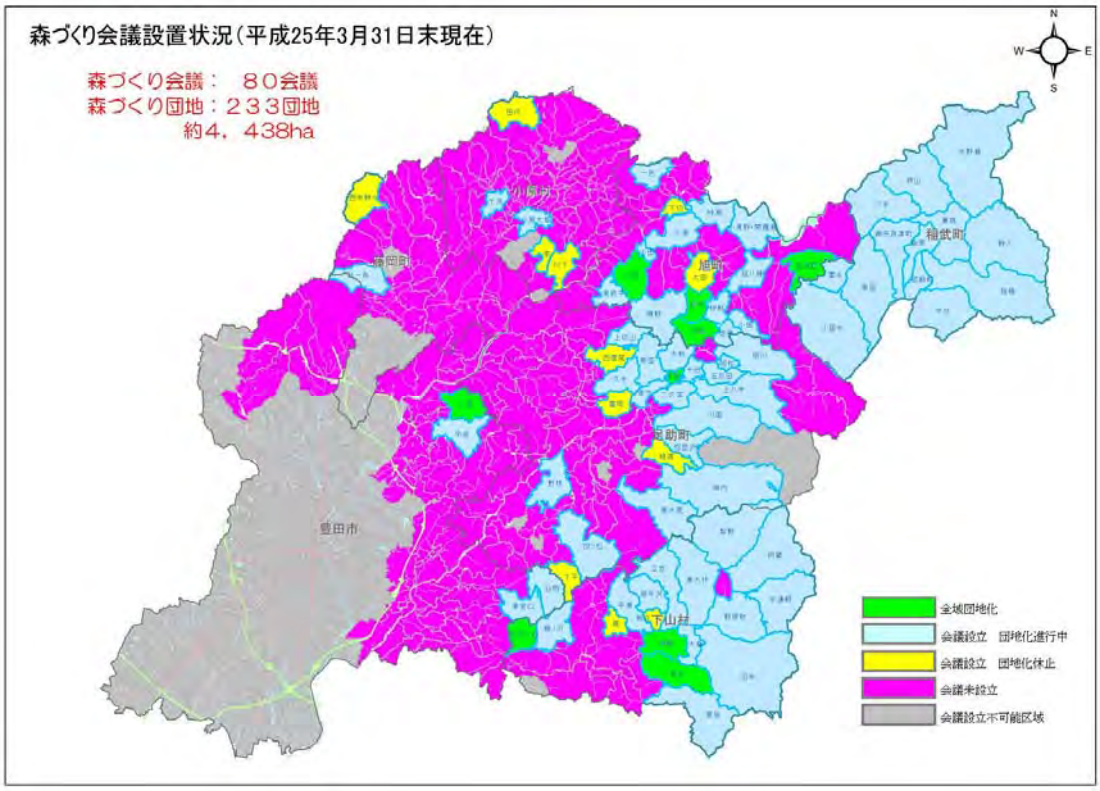
豊田市は 2007 年に「100 年の森づくり構想」「森づくり条例」「森づくり基本計画」を、恵那市は 2008 年に「えなの森林づくり基本計画」「えなの森林づくり実施計画」を、岡崎市は 2011 年に「森林整備ビジョン」を、それぞれ制定した。

愛知、岐阜、長野県はそれぞれ 2009 年度、2012 年度、2008 年度から「あいち森と緑づくり税」「清流の国ぎふ森林・環境税」「長野県森林づくり県民税」を導入した。しかし岡崎市や豊田市では、あいち森と緑づくり税による間伐面積が増えた一方で、他の補助事業等による間伐面積が国の政策転換の影響もあって減少した結果、全間伐面積は 2010 年をピークに減少傾向に転じた（図－４）。また神奈川県が行っているような水源地の他県に県税を支出する取り組みを愛知県は行っていない。県民の負担も愛知県、長野県が 500 円であるのに対して岐阜県は 1000 円であり、下流県よりも上流県の方が県民の負担が多くなってしまっている。



図―４　岡崎市と豊田市における間伐面積の推移

豊田市の森林施策の特徴は、「森づくり会議」と名付けられた集落ごとの森林自治を実現する組織である。森づくり会議の設立を推進したことによって、都市に近い森ほど、森づくり会議の設置が困難になるということが明らかとなった。その一番の原因は、大多数の森林所有者が無関心で、会議を主導できる適任者が見つからないことだった。都市に近い森ほど管理が行き届かなくなる「ドーナツ現象」とでも言うべき状況が出現している（図―５）。この状況を打開するための決め手となる施策は、矢作川流域圏ではまだ誰も示すことができていない。



図―５　豊田市森づくり会議設置状況（豊田市、2013）

また岡崎市では、前述した森の健康診断の１巡目と２巡目の結果を比較したところ、恵那市のような数値の改善はみられなかった。旧額田町で行われた結果報告会では、「材価が安いことが最大の問題であって、材価が上がれば問題は自動的に解決する」「行政はもっと材価を上げる努力をすべきだ」という意見が多く聞かれた。明治時代から 100 年以上、森林を主に木材生産の場として見てきた地域では、森林の木材生産以外の価値に光を当てることは容易ではなく、木材生産が活発になれば、公益的機能もおのずから発揮される、という非科学的な予定調和論がいまだに固く信じられている実態があらためて明らかになった。確かに材価が上昇すれば木材生産はある程度、活性化するかもしれないが、それは公益的機能を顧みない低コストで大規模な方式で行われる可能性がある。また、木材生産による利益を最大化するために皆伐した跡地に植林をせずに放置する者が後を絶たず、各地で問題となっている。

５．　流域圏一体化へ向けての新たな取り組み

国土交通省は、1997 年に改正された河川法に基づき、2006 年に矢作川河川整備基本方針を策定し、2009 年には同省中部地方整備局が矢作川河川整備計画を策定した。これらの計画に基づき、2010 年８月に河川管理者、行政、関係団体、市民が参加して矢作川流域圏懇談会が設立され、地域部会として山部会、川部会、海部会が設けられた。山部会では流域住民の主導で議論の出発点「矢作川の恵みで生きる」を共有し、山部会で扱う課題として「人と山村」「森林」、当面の解決方法として「山村再生担い手づくり事例集」「森づくりガイドライン」「木づかいガイドライン」の策定を行うこととし、それぞれ行政、森林組合、研究者、森林ボランティア、住民によるワー

キンググループを組織して毎月 1 回会議を行っている。

旧額田町や稲武地区と同様、古くから木材生産に重点を置いてきた根羽村では、皆伐後の植林にかかるコストを低減するための検討会を立ち上げたが、流域圏懇談会の設立を受けて、コスト低減と同時に矢作川流域圏に配慮した木材生産・植林方式を検討する必要があるとして、この検討会に流域圏懇談会のメンバーを加えて議論を開始した。流域圏懇談会に山部会が設けられ、関係者が集まり、議論を始めたことが、矢作川流域圏で森づくりに携わっている森林組合や行政を動かしつつあり、流域圏が一体となった森づくりへの機運が高まってきている。流域圏懇談会は 9 年間を 1 サイクルとして課題の解決手法を提案し、実践することを目標としており、今後の流域圏の森づくりをリードする役割も期待されている。

矢作川流域圏懇談会では、森づくりと並行して、木づかいガイドラインの議論も進めている。ここで木づかいとは土木や建築、木工の材料としての利用にとどまらず、エネルギー利用も含まれる。単なる木づかいであれば輸入材や、日本の他の地域で生産された木材との競争になるので、流域圏の木づかいは、流域圏材の木づかいとすることが望ましい。矢作川流域圏住民には、木材を購入する際、矢作川流域圏材を選んで購入することが、自らの安心、安全な暮らしにつながるというストーリーを理解し、流域圏材を積極的に選択して使うことが求められており、矢作川流域圏の木材生産関係者には、そのような意識に目覚めた流域圏住民が流域圏材を容易に購入できるようなウェブサイトの構築や、アンテナショップの創設、流域圏材の安定供給体制の構築などに、一体となって取り組めるかどうかが問われている。

６．おわりに

矢作川におけるこれまでの森づくりへの最近 10 年間の取り組みについて概観した。

かつて矢作川の森づくりのキーワードは「植林」であった。しかし流域の山がほぼすべて森林で覆われ、時を同じくして木材価格が低迷し、木材生産が不活発になり、植林できる場所（皆伐跡地）がなくなってきたことに伴い、植林が必要な状況は終わった。

10 年前から現在に至るまでのキーワードは「不健康人工林の間伐」だった。不健康人工林の実態が明らかになり、森林への関心の高い地域では間伐が劇的に進んだが、関心の低い地域では間伐が進んでいない。また木材生産を重視して間伐の伐倒木を搬出しようとすると、同じ作業員の労力で間伐可能な面積がその分、減ってしまうこともわかってきた。

矢作川流域圏の森づくりの今後のキーワードは「流域圏の木づかい」となるかもしれないが、「不健康人工林の間伐」も、特に市街地に近い森や木材生産が困難な人工林では、大きな課題として残り続けるだろう。また今後は生物多様性やレクリエーション機能の発揮といった機能や、人工林だけでなく天然林についても目を向けていく必要があろう。

引用文献

蔵治光一郎・洲崎燈子・丹羽健司（編）『森の健康診断－100 円グッズで始める市民と研究者の愉快な森林調査』築地書館、2006 年

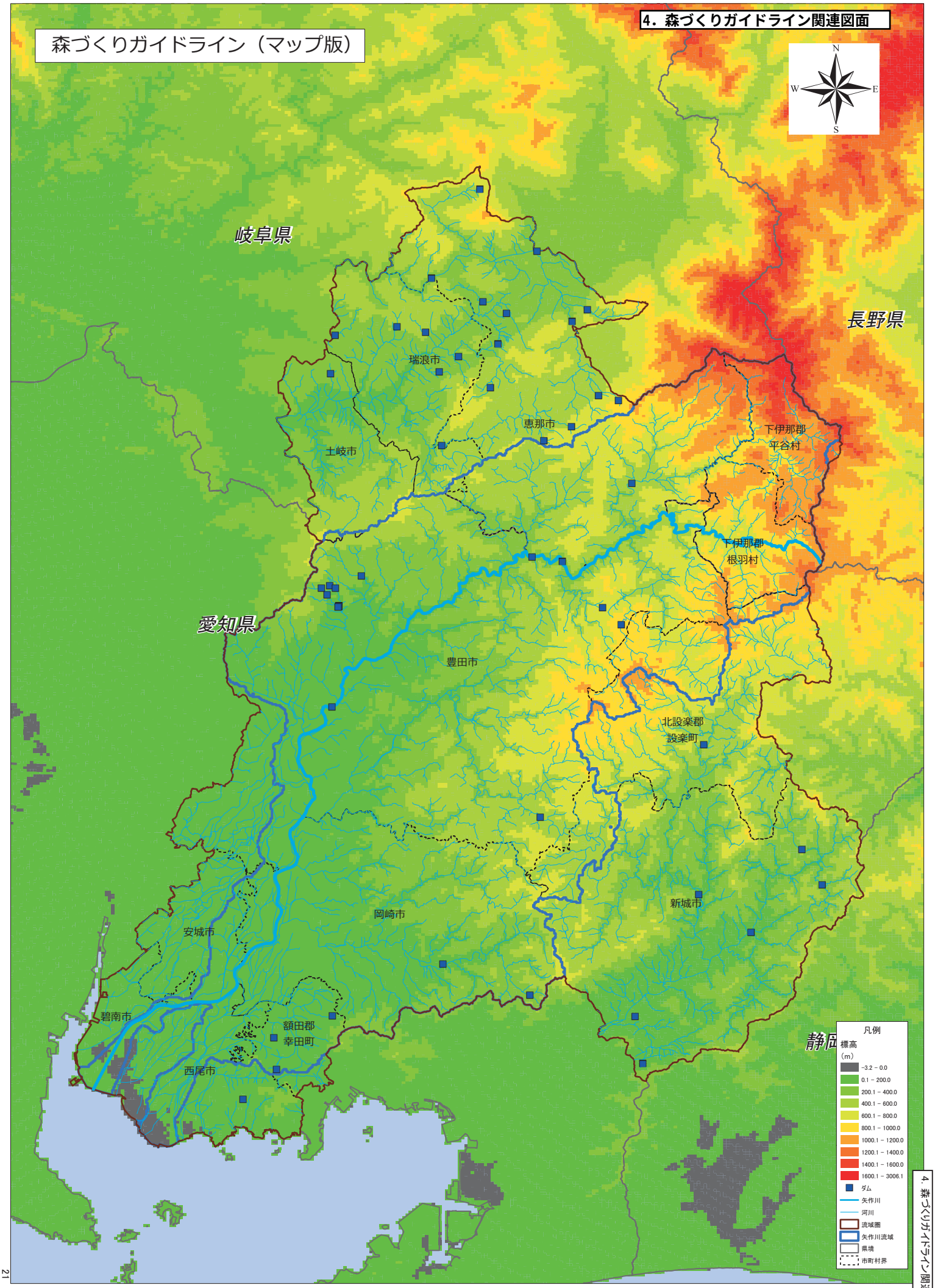
銀河書房（編）『水源の森は都市の森』銀河書房、1994 年

依光良三（編）『流域の環境保護』日本経済新聞社、2001 年

矢作川漁協 100 年史編集委員会『環境漁協宣言　矢作川漁協 100 年史』風媒社、2003 年

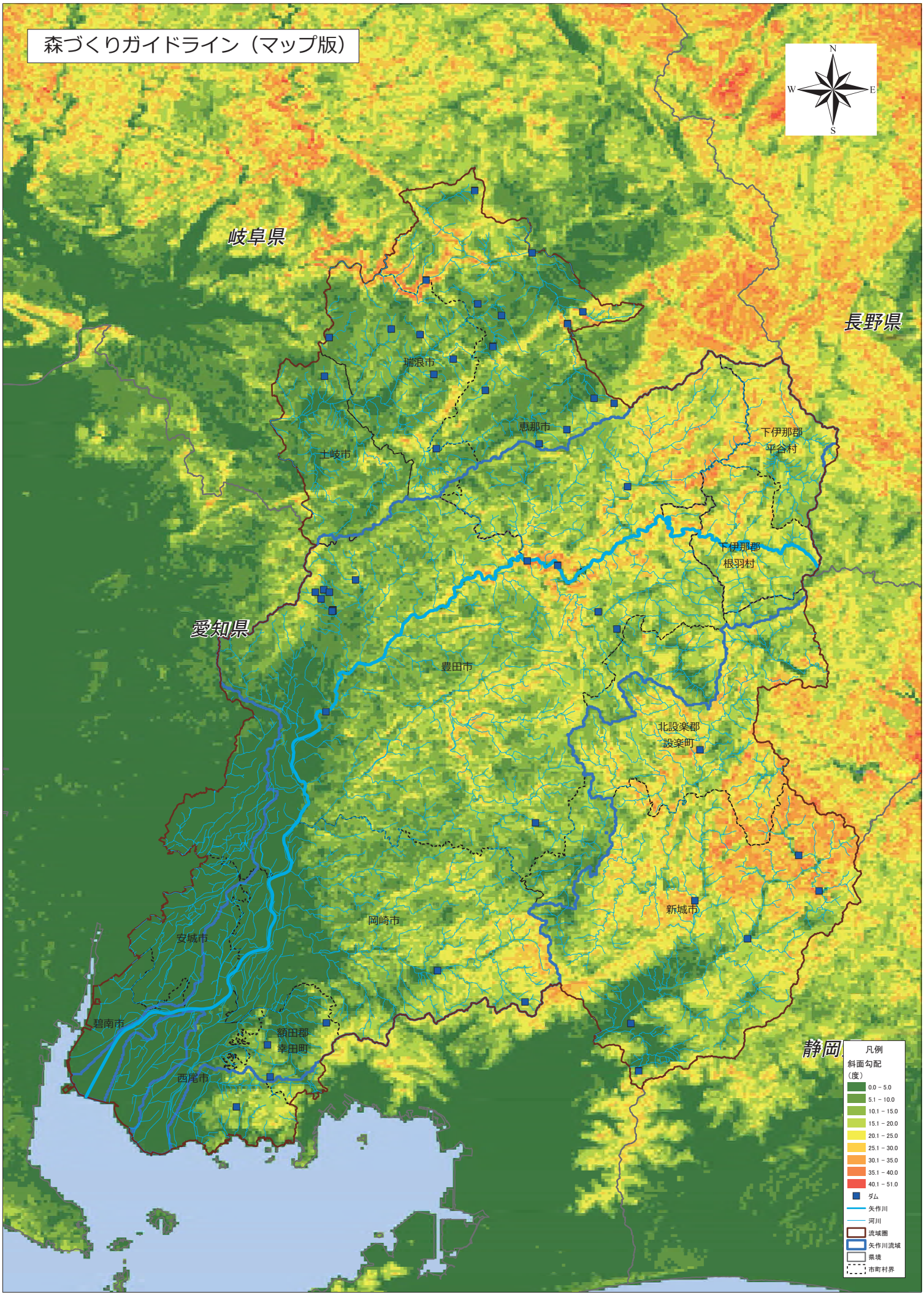
酒井秀夫『林業生産技術ゼミナール　伐出・路網からサプライチェーンまで』全国林業改良普及協会、2012 年
第 8 回矢作川森の健康診断実行委員会「第 8 回矢作川森の健康診断 2012　概要版」、矢作川森の健康診断実行委員会、2012 年
第 9 回矢作川森の健康診断実行委員会「第 9 回矢作川森の健康診断 2013　概要版」、矢作川森の健康診断実行委員会、2013 年
豊田市「平成 25 年度第一回森づくり委員会資料３－１」、2013 年（http://www.city.toyota.aichi.jp/shingikai/ag/39/2501siryou0301.pdf）
渡邊守・田島健「ダムにおける堆砂対策の現状と課題―矢作ダムを事例として―」日本水産工学会秋季シンポジウム「ダムにおける堆砂対策の現状と課題」、1-4 頁、2008 年

森づくりガイドライン（マップ版）



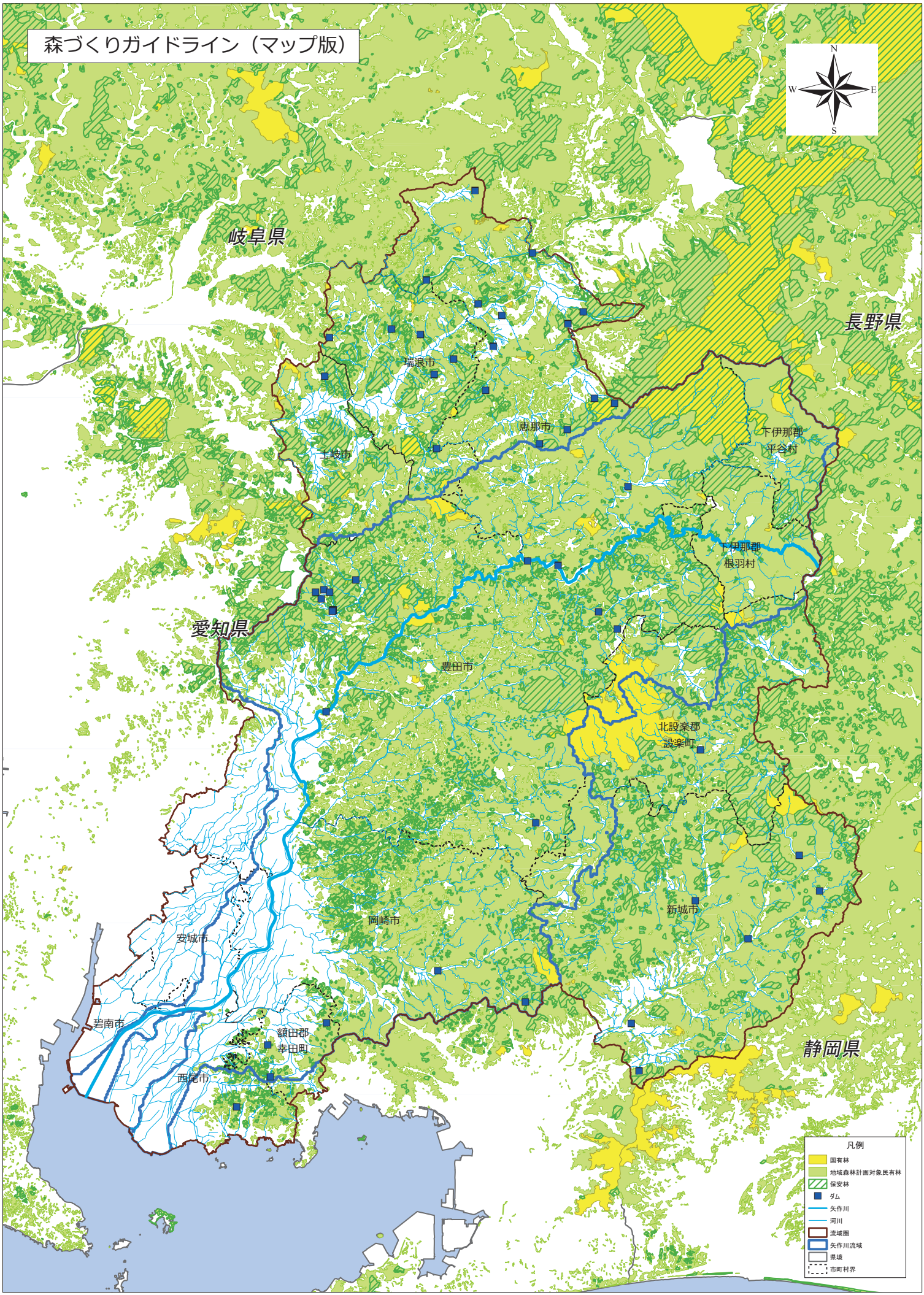
0 2.5 5 10 15 20 km

森づくりガイドライン（マップ版）



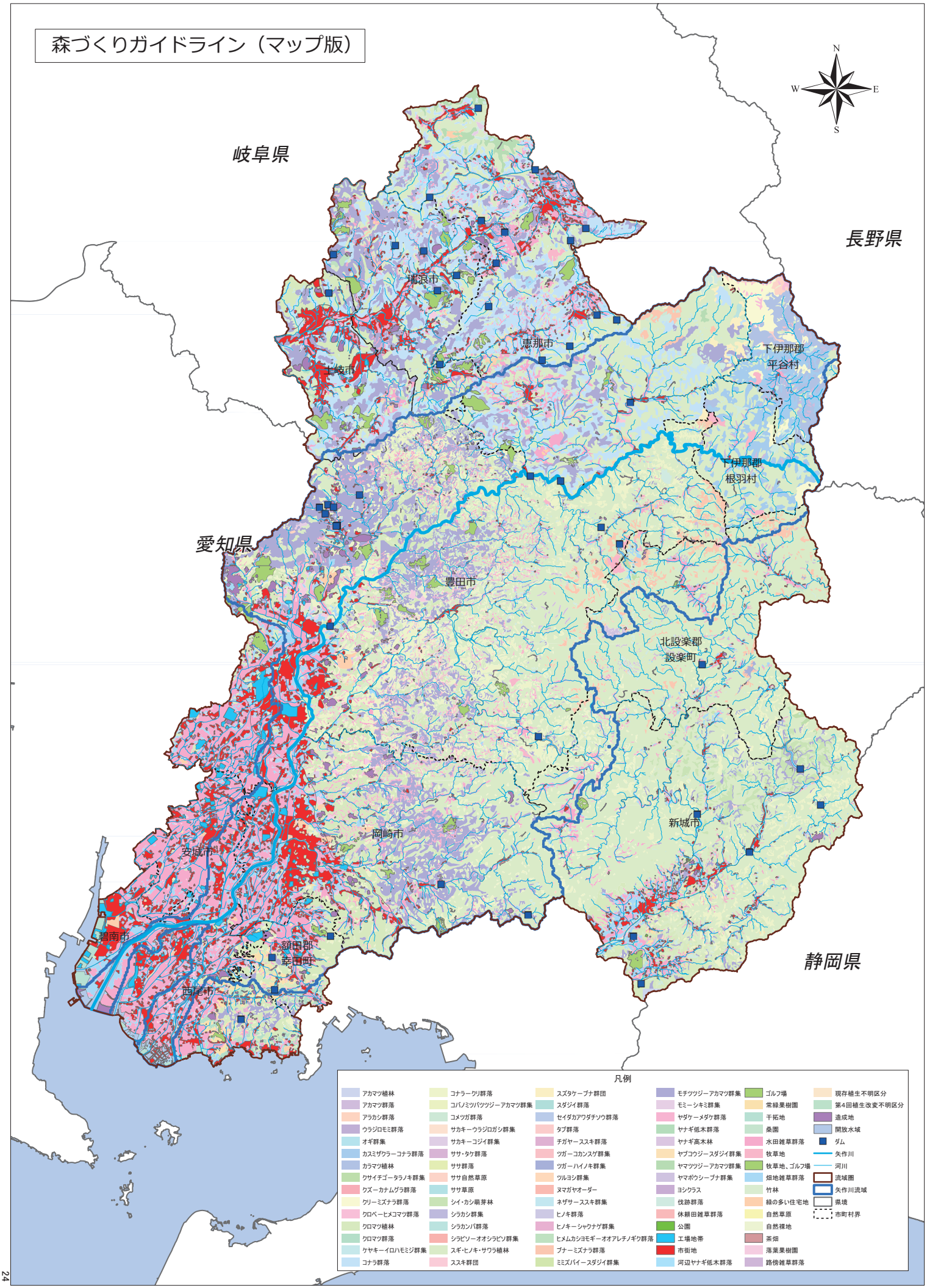
0 2.5 5 10 15 20 km

森づくりガイドライン（マップ版）



0 2.5 5 10 15 20 km

森づくりガイドライン（マップ版）



・矢作川流域圏木づかいガイドラインについて

1. 平成 25 年度　木づかいガイドラインの活動総括について

2. 平成 26 年度　木づかいガイドラインの活動方針について

3. 川・海部会との連携手法について

・ブレーンストーミングの結果による木づかい推進の考え方

・矢作川ディズ　木づかいガイドライン　ライフステージアタック表（イメージ案）

平成 26 年 1 月 27 日

木づかいガイドライン作成関連資料

1　平成 25 年度　木づかいガイドラインの活動総括について

① 行政・森林組合等森林・木材関係者を中心とした木づかい推進の検討は、市民目線から離れてしまい、一部の専門家集団による議論に特化されてしまう懸念が生じた
② また、こうした関係者のみによる課題検討の傾向を打破する意味においても、流域圏懇談会への市民参加があるのではないか、との強い意見もあった
③ そこで山部会の参加者全員が森づくりを含めた木づかい推進に対する検討に参加し、参加者ひとり一人がどんなガイドラインが理想的なのか、その形を検討するため「皆を木の世界に誘うためのブレーンストーミング」を実施した
④ このブレーンストーミングの実施結果により、ほぼ参加者全員が自然・森・木に対する鮮やかな原体験を認識しており、その原体験が現在の自然志向に結びついているという、原体験効果の重要性が共通認識となった
⑤ 同時に、「知識を得る」ことよりか、もっと体感的なことや自然の持つ神秘性・美しさ・生命感を感じ取れるような感性が育まれる場面づくりの重要性が認識された
⑥ また、こうした原体験が青少年期に集中することから、木づかい推進にあたっては青少年期から森や木に触れ合う機会や場所を設けていくことの大切さが認識された
⑦ 青少年期から木づかい推進を進め、こうした場面や機会を矢作川流域全体に広げていくためには、まず市民目線から日常的に木づかい推進に結びつく行動・活動を考えてこれを核とし、その行動・活動を行政・業界・研究が支援していくような形が望ましいという結論となった
⑧ こうした考え・思想を流域住民に理解してもらうため、「人生を楽しみ愛する家族と共に幸せに暮らす　森や木とそれを育む矢作川の流れと共に生きるライフスタイルへの誘い　矢作川ディズ」としてまとめてみた
⑨ こうした取りまとめを踏まえ、赤ちゃんから始まるトータル的な各ライフステージにおいて、市民目線による木づかい推進を行う「矢作川ディズ　木づかいガイドライン　ライフステージアタック表（イメージ案)」を作成した
⑩ アタック表の作成と森づくりガイドラインの検討を含め、これをより具体的に進めていくため、さらに広域的な県職員・市町村職員の参加を呼びかけた結果、山部会への参加者も増え、特に 3 県の林業普及指導員による統一的な情報の把握や、県の垣根を越えた活動や連携を期待している
⑪ 同時に、流域内で関連する方々の新たな拾い出しを呼びかけて、本年度の活動は終了している

2　平成 26 年度　木づかいガイドラインの活動方針について

① すでにアタック表に掲載できる既存の活動や、これから実践できる活動を加えたより現実的なアタック表とするため、既に木づかい推進に取り組まれている実績のあるスタッフや、関連するスタッフを新たに探して部会に参加してもらう

② 新スタッフを加え、平成 25 年度のライフステージアタック表（案）をベースに、すでに取り組まれている「とよた森林学校」等の活動を表に落とし込んでみることにより、広範囲の木づかい推進活動をアタック表の視点から見える化してみる

③ この時点で分析を行い、どの部分が充実していて、どの部分が弱いのか把握し、アタック表を再整理してみる

④ また、ここで明らかになった先進的な取り組みを数回、部会として体験してみる

⑤ この先進的な取り組みが他地区へも比較的簡単に導入することができれば、それをアタック表に加えて見える化する

⑥ これにより、現時点での木づかいガイドラインの原形を作成する

⑦ 核となる市民活動（提案されたものも含める）ごとにプロジェクトチームを結成し、行政・業界・研究者の上手な連携の形態を提案、あるいは構築できるように検討・働きかけを行い（どの程度までできるかは検討）ながらアタック表に掲載して、皆が現実的な取り組みとして行動できるように段階的に木づかいガイドラインの作成を進める

3　川・海部会との連携手法について

① 川・海部会の方と木づかい推進のテーマで検討する場が欲しい

② このため例えば、現在部会毎に開催している形態を、川・山部会とか海・山部会とかせいぜい 2 部会の参加に絞って合同部会を開催してみてはどうか。

③ また、その際には事前にこれを考えてきてほしい、という内容を相手に投げかけておいてから部会を開催したい

④ 現時点で木づかい等で提案するなら、次のとおりです

ア　川・海部会で考えられる木づかいとはどんなものがあるか

イ　川・海を親しむために、「木づかい」によってどんなことができるのか

ウ　川・海部会から山部会に求めるものとは何か

エ　山部会員は恐らく余り、川・海部会に参加していないと考えられるので、そのような人が始めて、川・海に問題意識を持つのに適した現地見学とは何か（上手に誘っていただければと思います）

オ　川・海部会の方が、山部会員に最低これだけは理解しておいて欲しいと望むものは何か

ブレーンストーミングの結果による木づかい推進の考え方

①ブレーンストーミングの結果、市民が主役となって生活の中で自然に木づかいを推進してもらうためには、市民のライフステージに合わせた取り組みが必要と考えられる。

②特に、年少の頃の自然との触れ合い等の原体験が、今後の自然観や森や木や水への関心度を高めることに対して、極めて重要であることが共通認識されているので、年少時からの木づかい推進の関わりを重視したい。

③矢作川流域ならではの森や木と水と共に人生を楽しむライフスタイルをまず、市民生活の中において意識化（矢作川ディズ）させ、産官学の連携によって、中でも森林づくりや木づかい推進を特に意図しながら進めていきたい。

④市民のライフステージをベースにして多岐に渡る木づかい推進項目を整理し、各項目ごとにフォーマットを決めて検討を進めることで、テーマの絞り込み・集中化・関連する関係者の招集・ワーキング活動がやりやすくなると考えられる。例えば、今回のテーマは、Ａ－アー①という具合に。山部会での様々な木づかい推進アイデアを各ライフステージに盛り込んで形にしたい。

⑤推進項目のフォーマットが決定できれば、パターン化による電子媒体化・電子本・共通ホルダー化の作成も検討したい。場合によっては、市民からの情報収集も行いたい。

⑥市民が実践しているフリーペーパー「耕ライフ」誌のセンス・コンセプトを活かして、多岐に渡るテーマから順番にテーマを決めて、ポイント的に紹介して「矢作川ディズ」の見える化と推進を図りたい。

⑦推進項目やライフステージの区切りについては現行のイメージ（案）をベースに、ブレーンストーミングにより整理したい。

⑧ガイドラインの作成を進めるにあたり、森づくり・木づかいの最前線の方々の参加によるワークショップを実践したい。その方々の現行の取り組みやワークショップの取り組みをライフステージアタック表に整理して組み込むだけでも、矢作川流域オリジナルとなるトータル的な木づかいガイドラインが作成できると考える。

⑨各県の林業普及指導員が参加してくれることにより、森づくり・木づかい推進の各県の共通項目による情報収集・人の輪づくり・行政提案・活動実践がやりやすくなると考えられる。各県の指導員の密な連絡・連携体制を期待したい。

矢作川ディズ　木づかいガイドライン　ライフステージアタック表（イメージ案）

矢作川ディズなライフスタイルを確立するためのライフステージアタック対象	ライフステージの特徴	市民編A 森や木と水と共に人生を楽しむライフスタイル矢作川ディズへの誘い さぁ～しよう	行政編B 木づかい推進に向けた社会環境・システムづくりと矢作川ディズへの支援	業界編C 楽しい矢作川ディズの演出や木の製品提供とそのことによる持続可能な地域産業・生業の確立	研究編D 木のすばらしさを伝えて木づかいを進め、森林や矢作川の持つ役割の大切を普及させる
ア 赤ちゃん～ 保育園の入園前 対象者数	人生のはじまり 木のぬくもり 三つ子の魂 100 までも	① センス・オブ・ワンダーの大切さを理解しよう ② 木のぬくもりで育児をしよう ③ 家族で自然の息吹を感じよう ④ 安心して野外で遊ぼう ⑤ 記念植樹をしよう ⑥ お母さんに読んでもらいたい本	① お父さんと母さんと赤ちゃんのための優しい緑の散歩道づくり ② お父さんとお母さんと赤ちゃんのための優しい緑の公園づくり ③ 子供とお父さんおかあさんが過ごしたい木と緑に囲まれた憩いの空間づくり	① 子供の安全な子育てに配慮したベビーベッド ② 安心して使える木の食器 ③ 木のおもちゃの提案 ④ お風呂に浮かべる木の玉プレゼント ⑤ 小さな子供さんに配慮した緑陰樹を植える	① 幼児期における木との触れ合いがもたらす効果 ② 幼児期における緑の空間がもたらす効果
イ 保育園児	人生のはじまり 木のぬくもり	① 自然を感じてみよ	① 木造保育園の設置	① 木造保育園モザイ	① 木造校舎が児童に果た

対象者数	三つ子の魂 100までも 五感の発達	う ② 木で遊ぼう ③ 木と森の物語を楽しもう ④ 子供と楽しもう	② 身の回りの木造製品の施設設置 ③ 窓辺を覆う緑のカーテンづくり	ク床パネル ② 保育園児のための積み木のプレゼント（針・広の樹種）	す様々な効果 ② 保育園児の好きな形・玩具の研究
ウ 小学校 対象者数	感受性の高まり 自我の芽生え センス・オブ・ワンダー 人間関係の構築（仲間に対する信頼・友情等） 自分の力の認知	① 自然を五感で感じてみよう ② 自然観察をしてみよう ③ 君に教えるふるさとの木の四季の姿（マイツリーを見つけよう・植えよう） ④ 木の工作をしてみよう ⑤ 木の面白科学実験で木を好きになろう ⑥ ネイチャーゲームで楽しもう ⑦ 森の中で秘密基地	① 子供たちが入っても安全な学有林の設置 ② 先生のための木育指導ガイドブック（流域編） ③ 先生のための木育指導研修 ④ 先生のためのブックレビュー ⑤ 地元の木を使用した魅力的な校舎の建築 ⑥ 入学祝い・卒業記念になる机・椅子セットのプレゼ	① 児童と先生のための山仕度セット（地下足袋・鉈・鋸セット） ② 地元の木を使用した魅力的な校舎の建築 ③ 木のキットハウスの提案（木の工作室） ④ 木と木を結ぶスカイウォーカー・ワイヤー滑り・ツリーハウス ⑤ 児童のための丸太・木材プレゼン	① 自然との出会いがもたらす創造力・観察力・協調性の効果 ② 木造校舎が児童にもたらす情操効果 ③ 子供のための木の科学実験ガイドブック ④ 森の働きについての理解を高める教材づくり

		を作ろう ⑧ ボルダリングで岩を楽しもう ⑨ ツリークライミングで木を楽しもう ⑩ ツリーハウスを作ってみよう ⑪ こんな本を読んでみよう ⑫ 木と森の物語を楽しもう ⑬ 川に行ってプラナリアを見つけよう	ント ⑦ 少年たちに向けた地域と結びついた水と木と森の物語の創作 ⑧ 小学校の授業に山の授業を導入 ⑨ 地下足袋を揃える	ト ⑥ 端材を活用した教材キットの開発	
エ 中学校 対象者数	思春期	① 木の名前と特徴を知ろう ② 仲間と海から水源（逆も可）を目指す流域の旅に出かけよう ③ 流域の面白い場所を見つけよう ④ 自然の中	① 森と木に親しむ中学生のためのチャレンジ読本の創刊 ② 森と木に親しむ技能ブックの紹介 ③ 大工と建てる木の家と内装 ④ 森と川と共に生き	① 児童と先生のための山仕度セット（地下足袋・鉈・鋸セット） ② 地元の木を使用した魅力的な木造小学校の建築 ③ 木のキッ	

		でチャレンジしてみよう ⑤ こんな本を読んでみよう ⑥ 山づくりのプロの技を見よう	た人々を学ぶ	トハウスの提案（木の工作室） ④ 木と木を結ぶスカイウォーカー・ワイヤー滑り ⑤ 児童のための丸太・木材プレゼント	
オ 高等学校 対象者数	人生の選択	① 矢作川流域圏懇談会の調査に参加してみよう ② 身近な里山を活用するプランづくりをしてみよう	① 緑と川と共に生きていくライフスタイルの提案 ② 木と緑と川の最前線で働く卒業生に今の職業を聴く ③ 地域づくりを目指す若者のためのふるさとの自然を教える行政主導のガイダンス	① 私達の木と緑の職業案内 ② 地域を活かした地域産業ガイダンス	① 木と緑と川のための新たな研究者を求めるガイダンス
カ 大学	自我の確立	① 森や木や流域に対	① 学生の研究や起業	① 各県の林業研究機	② キャンパス内の木質

専門学校 対象者数		するテーマを見つけてみよう ② 地域社会の改革にチャレンジしてみよう ③ 遊休農地・里山活用にチャレンジしてみよう ④ 地域で活躍している人たちに会いにいこう ⑤ マイチェンソーを持ちましょう	チャレンジのためのフィールド提供	関と連携した木質化推進テーマ研究	化・都市部等の木質化に関する研究 ③ 水源地域での大学演習林設置による市民に向けた森林学習
キ 就職 対象者数	社会人	① 自分の職場環境で木づかいを進めてみよう ②	① 就職記念の木のフィールド提供 ② 企業による毎年恒例記念植樹・緑の回廊づくりの場の提供	①木と共に暮らす様々なアイテム	
ク 市民・社会人 対象者数	ライフスタイルの確立	① 地元の木で家を建てよう	① 市民や公共施設の木づかい	① 地元の建築士・工務店によ	① 木の住まいの魅力を伝える様々な

		② 木のお店へ出かけてみよう ③ 木の木陰を見つけて散歩やサイクリングをしよう ④ 森や源流を訪ねて四季を楽しもう ⑤ 暮らしやすく魅力的な自然環境をつくろう ⑥ 身近な里山で母樹を見つけよう ⑦ 地域材住宅の見学会に出かけよう ⑧ 木の住まいを考えるにはこんな本を読んでみよう ⑨ 里山の哲学と知的財産に会いに行こう	を推進する様々な制度と支援策 ② 木づかいを推進するための業界と研究機関との連携やシステムづくり ③ 木づかいによる公共空間づくり市民活動スギダラ　ヒノダラ　広ダラ　矢作川の実践 ④ 木と森と田舎との出会いバスツアー交通費支援 ⑤ 田舎の親戚制度で田舎を持つ ⑥ 木材のパイロット価格制度導入による木材の安定供給	る様々な木の住まい提案 ② 様々な木の製品を扱うお店からの住まい提案 ③ 各社の快適住まい最新提案 ・ 断熱 ・ 結露 ・ 防水 ・ 温度・湿度調整 ・ 防音 ④ 広葉樹の利用編 ⑤ 径級別建築部材確保による建築部材の共通化 ⑥ 木材利用ポイント制度の普及	科学的データ ② ウッドマイレージの考え方による国産材の普及 ③ 木造公共施設の低コスト建築方法

結婚 対象者数	旅たち	① 記念樹を植えて木と共に生きよう ② 木の住まいを検討してみよう ③ ライフプランを考えよう ④ 素敵な木の教会での挙式 ⑤ 森に祝福される日	① 木づかいによる結婚式の素敵な演出・支援措置 ② 結婚記念林の設定	①木の結婚記念品の開発	
出産 対象者数	家族			① 木の出産記念品の開発	
マイホーム 対象者数	家族の和 生活拠点				
増改築 対象者数	住まいの補修	① 現在の住まいを木造にしてみよう ② 室内の内装に木を使ってみよう	① 木づかい推進のための増改築支援		
セカンドハウス 対象者数		① 仲間と集まる家を建てよう ② 里山サロンを作ってみよう ③ 遊休農地でクリエ	① 市民による木づかい推進・地域づくりのための活動拠点施設支援	①小さく住まう住宅提案	

		イティブな農業にチャレンジ	② 遊休農地活用と結び付けた里山活動拠点施設 ③ 田舎の親戚制度の創設		
市民・社会活動対象者数	森づくり・木づかいを通しての人生の楽しみ	① 皆が集まる公共空間を木と緑の憩いの空間に変える ② 木づかいや流域を愛する気持ちをつなげ絆を高める矢作川ディズ駅伝（海から水源（1日目、水源から海2日目水源から海）をやってみよう ③ スギダラ・ヒノダラ・広ダラ矢作川運動の推進			① 森の健康診断の結果報告 ② 木づかい推進による持続可能な地域づくりは可能なのか
人生の達人	後世にスピリッ	① 森づくり	① 地域文化	② 技能・文	① 偉人達の足

対象者数	トを伝える 後世に技術・技能を伝える	やその歴史を語ろう ② 自慢の我が家を紹介しよう ③ 森や木や矢作川の流れと共に暮らした良き日々を語ろう ④ 人生の達人者のお話を傾聴しよう	の発信施設	化の継承 ③ 達人が伝えたい森・木づかいの場	跡を後世にわかりやすく伝える